

弘前藩士の婚姻について

黒 瀧 十二郎

はじめに

弘前藩に於いて法制面の整備が見られたのは、藩政確立期の四代藩主津軽信政の時代であつた。

婚姻法については記録がきわめて乏しいが、相続法と同様にそのアウトラインができたのは、信政の時代と思われる。

藩士の婚姻は、成立する時であれ離縁であれ、藩の許可が必要だったので、「弘前藩庁日記」や「御用格」等に記録されている。しかし、これらの史料には断片的に記載されているにすぎず、その実態を究明することは非常に困難である。そのため本稿では、大雑把な概要という意味で述べることにしたい。

一 婚姻の成立

(1) 縁組の規定

弘前藩士の婚姻（普通は縁組と称していた）に関する規定は、寛文元年六月二十一日の「諸法度」十一カ条中の第八条が現存する最も古い

ものである。即ち、

一、嫁娶之儀、近年甚花麗にをよふ、自今以後諸道具以下分二過たる類、不致結構可用儉約事、

これは最近縁組が贅沢になってきているので、一層の儉約をせよ、というものである。

翌二年の「家訓条々」十七カ条中の第十五条に左のように見える。

一、縁辺之儀私を以不_レ可_レ定。尤嫁娶之規式美々數不可_レ致事。

右によれば、藩士の縁組は藩の許可が必要とされたのであり、幕府法「私不_レ可_レ締_二婚姻_一事」「国主 城主、壹万石以上并近習、物頭者、私不_レ可_レ結_二婚姻_一事」が背景にあつたことはいうまでもない。それは八戸藩や隣藩の盛岡藩でも同様であつた。

弘前藩の具体的な縁組についての規定には、寛文五年十一月二十九日に出された「縁組之覚」がある。

一、御手廻中縁組之儀、双方可得御意事、

一、御本参縁組之儀可得御意事、但御本参末之娘・養子娘之類、新地士_〔縁組之儀者不得御意_〕候事、

一、御手廻・御本参妻相果、再三之縁組之儀者不得御意候、但大身

衆・物頭・(物)奉行者、雖為再三縁組之儀可得御意(候)事、

一、名跡躰養子之儀、如御法令吟味可得御意(候)事、

一、双方新知之縁組者不得御意(候)、但奉行所江可達事、

右之通得御意相究者也、

寛文五年霜月廿九日

右によれば、御手廻組クラスの御目見以上の藩士に対しては、縁組に際し藩主の承認を得ることの原則が示されたものと考えられる。これに対し、新しく知行を得た者(御目見以上か以下かは明らかでないが)は藩主の承認を必要とせず、奉行所へ届出ることと許可されたようである。これは、まさに藩政確立期の所産であつたといえよう。

寛文五年の「縁組之覚」(寛文五年の「日記」が現存しない)と同じものと思われるのが、「御用格」⁽¹¹⁾に寛政六年閏十一月二十九日の日付で記載されている(同年月日の「日記」には見えない)。

かくて史料的价值の高い両史料の存在は否定することができず、両者の関係については問題が残るとしても、後者は弘前藩の寛政改革(天明四年(文政八年)の一環として、藩士階級の秩序維持を再確認する意味で示されたものではあるまいか。

次に「弘前藩政事典刑誌草稿」第二冊(年代不明)⁽¹²⁾によれば、縁組について左のように見える。

婚姻

- 一、¹役柄大寄合以上ヨリ書院番以上エ
- 一、²役柄長袴着用以上ヨリ表書院番以上エ
- 一、³役柄熨斗目着用以上ヨリ中小姓⁽¹³⁾以上エ

一、¹役柄月並出仕以上ヨリ目見以上エ

但、役柄書院番以上ハ、親子目見以上エ禄ノ高下ニ不拘許之、総与力ハ表書院番マテ禄相当ハ許之、徒ノ者準之、

一、⁵縁組願ノ儀ハ雙方トモ頼ノ人ヲ以テ書付差出候事、尤熨斗目着用以下ノ者ハ熨斗目着用以上ノ者相頼候儀不相成事、

一、⁶官医縁組ハ町医エ相済候事、

一、⁷役柄目見以上ノ者ヨリ目見以下ノ者、并郷村市井社人修験町医凡而不釣合ノ者陪臣ハ縁組不相成事、

但、陪臣家柄普代⁽¹⁴⁾ノ者、役柄目見以上エハ格別ノ事、

以上、給禄有之者ノ例ナリ、庶人ハ年々八月人別改ノ節書出候事、

(各箇条の番号及び傍註筆者)

これは年代を確定できないが、江戸時代に於ける藩士の縁組が成立する基準が具体的に示されているものと考えたい。右の規定の大略は次の通りである。⁽¹⁵⁾

- ①大寄合(四段) 以上ヨリ書院番ヨリ御手廻(七段) 以上へ。
- ②長袴着用ヨリ長柄奉行(五段) 以上ヨリ表書院番ヨリ御馬廻(八段) 以上へ。

- ③熨斗目着用ヨリ御馬廻番頭(七段) 以上ヨリ中小姓(九段) 以上へ。
- ④月並出仕(九段) 以上ヨリ目見(十段) 以上へ。

⑤縁組は階層的に釣り合う者同士でなければならず、縁組願も縁組する者と相応の人を介して両方から提出すること。

以上述べた縁組の規定が具体的にどのような適用されていたか、次にその実態をさぐってみたい。

(2) 縁組の実態

第一に婚姻ができる年齢に関しては、幕府法では何ら規定はなく、許嫁は幼若の男女間でさへ許されており、縁組願は幼年でも出すことができた。したがって、実際の婚姻は縁組の許可を受けてから充分長い年月を経て行われた例もある。⁽¹⁾

弘前藩の場合は、初縁の一・二例を上げると左のようになる。

「日記」元禄六年九月三日の条、

一、去五月奉願候縁組、江戸江相伺左之通申渡之、

神源大夫

初縁

年十歳
六番目娘

杉山勘右衛門支配組

嘉右衛門嫡子

同

横山伝之介方江

右願之通被仰付之旨於会所申渡之、

右によれば、源大夫と嘉右衛門の階層（役職）は不明で、伝之介の年齢も明らかではないが、源大夫の娘はわずかに十歳である。二人の実際の婚姻は、この縁組願が許可されたかなり後のことではないかと推定される。

「日記」元禄六年二月七日の条、

縁組願

瀧川藤九郎

初縁

年十三
三番目娘

初縁

年十九
堀五郎左衛門方江

右縁組願之通被仰付之旨、於芙蓉之間

伝左衛門・藤九郎^(家老 津輕親)負被申渡之、(下略)

(傍註筆者)

藤九郎と伝左衛門のこの時期に於ける階層（役職）が明らかではないが、「日記」元禄六年正月の冒頭に藤九郎は青森在番目付「日記」同年二月の冒頭に伝左衛門は江戸御用と見えるが）五郎左衛門は十九歳で、藤九郎の娘は十三歳であったことが知られる。

「日記」元禄十二年二月十七日の条によれば次のように記されている。

一、今日被仰出候覚、

(中略)

一、縁組願之書付、双方之年付に不及事、

(中略)

右之通被仰付候二付、大帳ニ書添置之、

右のことから、元禄十二年に至り縁組願を出す際には、年齢を必ずしも記載しなくてもよくなったことが知られ、幕府法に準じていたといえよう。

第二に縁組が行われる際の両家の階層（役職）について述べる。

幕府法に於いては、縁組を願い出るべき男女は、その家柄身分にあまり懸隔がないことを必要としたが、この制限に関する確定の法例は存在しなかった。したがって疑問の場合には、関係者から内慮伺をもって裁決を仰ぎ、しかる後に正式の願書を差し出す順序であったのである。⁽¹⁾

弘前藩では次に示す具体例によって、その概略を知ることができる。

「御用格」(寛政本)／弘前市立図書館蔵／第六 御家中縁組之部によれば次の通りである。

①階層が対等の場合——○勘定小頭(十段)⁽¹⁶⁾ 工藤源八の娘が、勘定人(十段) 奈良万蔵方への縁組は願の通り(天明五年三月一日の条)。

○御徒目付(十段) 乳井門之丞の娘が、御徒目付鹿内理左衛門の忝方へ(天明五年六月一日の条)。

これは役職の釣合いがとれ、縁組願の許可は当然のことであろう。

②役職の懸隔が小さい場合——○御馬廻(八段) 八木橋勘右衛門の娘が、御留守居支配(十段) 布川文司方へ(宝暦十二年五月十五日の条)。○御馬廻一戸助太郎の娘が、御徒(十段) 三上平内方への縁組願は不許可(寛政四年三月二十四日の条)。

右の二例は、役職八段と十段の家の縁組で、前者は「弘前藩政事典刑誌草稿」の婚姻第四条の適用で許可され、後者が不許可となっている。その理由は「御用格」の記事が簡略なため不明である。

○御家老与力(十段) 高松太四郎の娘が、御馬廻(八段) 五十嵐忠右衛門の忝兵太郎方へ(安永五年七月一日の条)。○御手廻(七段) 奥瀬武太夫の娘が、御徒目付(十段) 永野多門方へ(寛政元年七月一日の条)。○勘定小頭格郡所小頭(十段) 千田兼蔵の娘が、御手廻(七段) 毛内藤左衛門方への縁組願は不許可(寛政七年二月十二日の条)。

右の三例中、後の二例は役職が七段と十段の家との縁組願で、役職の懸隔が小さく、許可されるべきものと思われるが、千田家は「俵式忝儀式人扶持外拾五俵老人扶持」、毛内家は「高百石」と記されているので、給禄の差が大きいために不許可になったと考えられる。

③役職の懸隔が大きい場合——○御家老(二段) 津軽主水の娘が、御手廻(七段) 山田剛太郎方へ(寛政二年四月一日の条)。○御家老津

軽主水の娘が、御小姓組(七段) 山本武五郎方へ(寛政四年正月十五日の条)。

この縁組は一段と七段で役職の差は大きい、例外として認められたものである。

④杜家と武家の場合——○御留守居組(九段) 神長太郎の娘が、斎藤長門忝方へ(寛政四年五月朔日の条)。

「弘前藩政事典刑誌草稿」の婚姻第七条によれば、右の場合は許可されないことになる。「日記」寛政四年二月二十二日の条に次のように見える。

(上略)

一、縁組之儀、右養子同様町在并御目見以上より以下⁽¹⁷⁾者難被仰付候、杜人・修験・医者勿論、凡而不釣合之儀願申出間敷候、(下略) この規定は、これまでと同じで特に新しいものではない。寛政四年に示されたのは、弘前藩の寛政改革に於ける身分秩序維持のためであった。かくて、杜家と武家との縁組願は許可されないのが原則であるが、それにもかかわらず許可されたのは、斎藤家が神主をつとめる弘前神明宮は、領内神明宮の筆頭の地位にあるために、特別に認められものと考えられる。

以上述べたことから、縁組願は両家の役職が対等か又は懸隔が小さく、給禄も相応の場合に許可されるのが原則であったと考えられる。それは藩体制社会を維持するためには当然のことであった。

第三は他藩の者との婚姻である。

「日記」享保二十一年三月二十七日の条に、左のように記されている。

一青森米町宮川由左衛門娘、南部領縁組願申出候得共、他領^江遣候儀、作右衛門^江違之、難成候無用ニ可申付候由申遣之、

(傍註筆者)

右によれば、青森米町宮川由左衛門の娘と盛岡藩(南部藩)の者との縁組願は不許可になっている。それは、弘前藩成立以降の南部藩との対立不和の關係が大きく影響しているからと考えられる。¹⁹⁾

「日記」天保三年四月一日の条には次のようにある。

一、戸田清左衛門申出候、大組警固早川儀助娘と、松前家中手塚苗藏方^江養女ニ差遣度、尤先祖由緒有之候ニ付被仰付度儀、願之通申付候間、可被申付旨申遣之、

これは、大組警固(第十一段。御目見以下)²⁰⁾早川儀助の娘を松前藩士手塚苗藏方へ養女に派遣することが許可されたものである。養女になることは、その後の婚姻を前提としてと考えてよいであろう。

右の二例から、前者は他藩への嫁入りが許可されず、後者は婚姻を前提にしていると推定されるが、他藩への養女が許可されたものである。したがって、右の二例だけからでは断定はできないが、他藩の者との婚姻は事情によっては許可されたものと考えられる。

かくて弘前藩では、原則として他藩からの養子を認めていなかったのであるから、他藩の者との婚姻も、原則としては認めなかったのではないかと推定したい。²¹⁾

最後に異なる身分間の婚姻について述べる。幕府法では、武士の間でも身分に大差ある者の間の婚姻は禁止されるが、下級武士と庶民の娘との婚姻は必ずしも禁止されない。しかし、許可されない場合もあるので、

これらの場合には、縁組願を出す前に、あらかじめ頭支配に対して内慮伺を出して許可を確かめておくのが穏当であった。²²⁾

弘前藩に於いては、「日記」寛政五年十月一日の条に、左のように見える。

一、今日御目付触左之通、

覚

御家中縁組之儀御定^成有之候処、在宅之面々所縁有之族、以来百姓縁談之儀願之上可被仰付候、此旨当番通用可被申触候、以上、

十月

御目付中

これは同年九月に出された藩士土着令にもとづき、農民との縁組を願の上許可する方針がうち出されたものである。この藩士土着政策は寛政十年失敗に帰し、藩士は農村から引き上げることになり、旧来通り弘前城下に居住することになった。²³⁾

「日記」寛政十二年十一月七日の条に、次のようにある。

一、今日御目付触左之通、

覚

去々年在宅御引上被仰付候節、百姓縁談并釣合之者縁組不被仰付候之旨御触被仰付候処、在宅之節取究置候趣に^而、今以右願申出候族も有之候得共、以来右之儀も御取上不被仰付候、此旨可被申触候、以上、

十一月

御目付中

右によって、藩士と農民との縁組は禁止され元に復したことが知られるが、在宅時に於ける農民との関わりから、ただちに徹底し難かったことが知られよう。

「日記」安政三年十一月十五日の条によれば、左のように記されている。

一、福嶋千之助回船水鉄蔵申出、別紙御渡書付吟味之處、福嶋千之助儀於十川村田屋所御座候處、百姓覺十郎儀、家内不足二而耕作手配行届兼候間、同村江家作取建、大伯父周次郎住居之上耕作手配仕せ、尤独身二付御留守居支配船水鉄蔵呼取女縁談相究度旨申出二付、住居差障有無之儀郡奉行江申遣候處、別而差障無之旨村役分別紙之通申出候二付、人別調役江吟味申付候處、人別帳江引合せ候旨申出候間、縁談之儀共願之通可被仰付哉之儀、町奉行・勘定奉行申出之通申付之、

右によれば、幕末の安政三年に御留守居支配船水鉄蔵の呼取の女——即ち彼女は、船水の娘として農民の覺十郎との縁組願が認められたことが知られる。これは下級の藩士の例である。

藩士土着制が廃止され、農民からの養子は禁止されたにもかかわらず、その後に農民からの養子を許可しているという混乱がみられ、また町人からの養子禁止も徹底化されず幕末まで後を絶たなかった。⁽²⁶⁾ 藩士と農民の婚姻は、右のことと連動して認められていったものと推定される。かくて、藩士の婚姻は相続の実態⁽²⁷⁾と同様に身分制度を次第につき崩し、弘前藩に於いて成立した封建社会を崩壊に導く要因の一つになったと考えるのである。

二 離縁と再縁

(1) 離縁（離婚）

幕府法では離縁の際に、夫家と妻の実家との両家より各別に雙方熟談の上、離縁する旨の届書を幕府に提出することが必要であった。即ち、夫の一方的意志による離縁は許されなかったのである。離縁届によって婚姻は解消し、再婚が可能になるのであり、離縁状のごときものは不要であった。⁽²⁸⁾

弘前藩に於いては、記録に残されているのは次のような四種類である。
①夫が死亡した場合——「御用格」（寛政本）第六 年若二付里方江引取之部、安永五年八月十日の条に、次のように見える。

一、田中宗右衛門娘、千葉相良悱民弥方江嫁申候所、民弥病死二付相良江申合、私方江引取申度、伺之通被仰付之、

「日記」享和元年二月二十四日の条には左のようにある。

一、足立又右衛門申出候、添田常三郎親有方儀病死之處、同人妻津輕頼母娘御座候處末年若御座候間、双方申合之上頼母方江引取申度旨同方申来候段願申出之、伺之通被仰付候、

右の二例によれば、前者は千葉民弥が病死したことにより年の若い嫁は実家へ引き取られた。後者は添田有方が病死したが、妻はまだ年も若く再縁の機会もあろうと考えられ、実家へ引き取られたようである。これらは夫が死亡したため、両家の相談によって願いが出され、離縁が成立したのであった。

②夫が追放となった場合——「御用格」從寛政三年至文政七年卷六の一、年若二付里方⁽²⁹⁾引取離縁共、文化八年六月七日の条によれば、次のように記されている。

一、小笠原其母申出候、聶佐藤弁之進儀昨晚御給分被召上追放被仰付、右二付娘儀昨夜私方⁽³⁰⁾引取候旨承届、

右によれば、佐藤弁之進が御給分を召上げられ追放となったので、年齢の若い妻（小笠原其母の娘）は実家へ引き取られて離縁となった。但し、右の史料からだけでは、犯罪内容及び縁坐法の適用については全く不明である。

③夫が出奔した場合——「御用格」從文政八年至弘化四年卷六、養子、天保二年六月二十四日の条に左のように見える。

一、菊池玄宅申出候、松田伝左衛門妻妹之处、伝左衛門出奔、妹儀年若二付引取申度、同人倅左市儀者、病身為養育養子仕度儀願之通、

右の史料によつて、菊池玄宅の妹が松田伝左衛門の妻であつたが、夫の松田が出奔して行方不明なので、菊池が妹を松田家より引き取ることが認められている。それは両家の相談による願い出があつたからと思われる。

④娘が聶を迎えたが、娘の不行跡による場合——「御用格」從文政八年至弘化四年卷六、年若二付里方⁽³¹⁾引取附離縁共、天保四年九月二十二日の条に次のように記されている。

一、今惣次郎申出候、叔父木村弥左衛門儀男子無之、娘方⁽³²⁾御留守居支配木村東弥弟新助儀聶養子先年願之通被仰付候处、新助妻常々不行跡二付、親類共相寄度々加異見候へ共、不相用増長二付、

比度離縁致せ私并親類共久離之旨承届之、

これは、木村弥左衛門の娘が、御留守居支配木村東弥の弟新助を聶養子に迎えたが、娘（新助の妻）の不行跡により、聶養子の新助が妻を離縁し、彼は妻の家から出たのである。

同じようなものに、右の「御用格」天保六年四月十一日の条⁽³²⁾に見える、奈良岡十之丞の娘と聶養子の十左衛門（菊池幸八の二男）の場合、「御用格」天保十四年四月十二日の条⁽³³⁾の、笹森治左衛門の娘と聶養子重吉（中畑孫作の弟）の例がある。

以上、弘前藩に於ける離縁の実態を考察しが、これは夫家と妻の実家（又は妻の家と夫の実家）との間の熟談により、願いを藩へ提出して許可されることによつて離縁が成立しているのであるから、幕府法に準拠しているといえよう。

(2) 再縁

幕府法によれば、離縁後の再縁については、聶養子が不熟の故を以て妻を離縁した場合に、事情によつては男女其他と再縁組をする自由を奪われが、普通の夫妻間に離縁があつた場合に於いては、その原因如何を問わず夫はいつでも再縁組願をさし出すことができたのに対し、離縁された妻は、離縁が夫婦間の不熟（不縁）にもとづく時には、いつでも再縁組ができるが、自分の病氣にもとづく時には、離縁の時から少なくとも六年を経過した後でなければ、再縁は許されない⁽³⁴⁾。

弘前藩の場合は、「御用格」（寛政本）第六 縁組之部、寛政四年閏二月二十九日の条に、御家老与力の「寺田⁽³⁵⁾□右衛門」の娘が御馬廻木村

金蔵方への再縁願が許可となった。同「御用格」寛政四年四月二十二日の条には、表医者佐々木玄端^{（藩主）}の伯母が郷士船水武右衛門方への再縁願が許可。同「御用格」寛政四年六月十七日の条によれば、表医者佐々木玄端^{（藩主）}の妹が、町医武田正庵方への再縁願が許可されている。

右の三例については、「日記」に記載されていないため、「御用格」の簡略な記事だけでは、再縁の経緯等その間の事情が明らかでない。

「御用格」天保七年十一月二十四日の条に次のように見えている。

一、今文蔵申出候、兄藤太郎方^{（藩主）}小鹿勝之進大伯母後妻縁談相究度、双方再縁ニ付伺之通、

但、藤太郎儀先年無調法之儀御座候而隠居被仰付候、其後医道稽古罷有候処年輩にも相成候ニ付、縁組之上追々別宅仕せ度儀添書を以申出願之通、

右によれば、今藤太郎が先年に無調法があつて、刑罰としての隠居を申しつけられた。その間、彼は医学を学び年数も経過したので、小鹿勝之進の大伯母を後妻に迎えたいという願いを藩へ申し出て許可されたのである。

これは右の三例と同様に「日記」に記載されていないが、再縁願が許可された事情が或る程度知られるものである。しかし、この一例のみでは、弘前藩に於ける再縁の実態は不明であるといわざるを得ない。

おわりに

弘前藩士の婚姻（縁組）の規定について、そのアウトラインができた

のは、藩政確立期の四代藩主津軽信政の時代であった。

婚姻は両家の役職が対等か又は懸隔が小さく、給禄も相応の場合に許可されるのが原則であったと考えられる。他藩の者との婚姻は原則として認められなかったと推定したい。異なる身分間に於いては、寛政五年に出された藩士土着令により公認されたが、しかし、藩士土着制度の実施が失敗に終るや再び禁止された。それにもかかわらず禁止が徹底されず、幕末に至っていることから、異なる身分間の婚姻は、相統制度の実態と同様に身分制度を次第につき崩し、弘前藩に於いて成立した封建社会を崩壊に導く要因の一つになったと考えるのである。

離縁は夫家と妻の実家との間（又は妻の家と夫の実家）の熟談により、その願いを藩へ提出して許可されることによって成立したので、幕府法に準拠していたといえよう。

再縁については経緯が判明する具体例に乏しく、実態は不明といわざるを得ない。

× × ×

弘前藩士の婚姻については、史料制約から以上述べた程度が判明したにすぎない。

註（一）拙稿「津軽藩士の相統についての考察」（『北奥地域史の研究』八長谷川成一編 名著出版 一九八八年）所収

（二）弘前市立図書館蔵。「江戸日記」と「国日記」の二種類あるが、本稿では後者を指すものとし、引用する場合は「日記」と表現する。

- (3) 弘前市立図書館蔵
- (4) 中田 薫『法制史論集』第一卷(岩波書店 一九二六年) 四六八頁
- (5) 国立史料館編『津輕家御定書』(東京大学出版会 一九八一年) 二四三頁
- (6) 蝦名庸一「津輕信政時代における法令の整備」(『弘前大学國史研究』第二十三号) に紹介されたものによる。
- (7) 『徳川禁令考』前集第一 一五四号 慶長二十年七月「武家諸法度」第八条
- (8) 同右一五七号 寛永十二年六月二十二日「武家諸法度」第八条
- (9) 工藤祐董「八戸藩武士家族法」(『弘前大学國史研究』第六十六号)
- (10) 「縁組前髪取袖留御定書」(延宝五年二月十八日) △弘前市立図書館蔵▽。尚、(一)の部分は「御用格」(寛政本) △弘前市立図書館蔵▽第六 御家中縁組之部に見える史料で補ったものである。
- (11) 註(10)参照
- (12) 「弘前図書館郷土資料目録」第二卷には、楠美旧蔵本とあるので楠美晩翠の編纂かと推定される。そうだとれば、彼の生没年から考えて明治前半期に作成されたことになろうか。
- (13) 役職の表現については、工藤他山「旧藩官制・職制」(国立史料館蔵)をもとにし、山上貢『津輕の武士2』(北方新社 一九八二年) 一七一―一七五頁に、工藤他山の右書をもとに作成した

- 津輕御家中Ⅱ藩士役職集成が見え、それをも参照した。
- (14) 註(4) 四七九頁
- (15) 同右 四七三頁
- (16) 註(13)参照。その後の各段も同じ。
- (17) 代々長門を襲名。弘前神明宮神主
- (18) 『青森県百科事典』(東奥日報社 一九八一年) 四六八頁
- (19) 松方冬子「近世中・後期大名社会の構造」(『武家屋敷』△山川出版社 一九九四年▽所収) 註(24)を参考とした。
- (20) 註(13)参照
- (21) 註(1)参照
- (22) 石井良助『日本法制史概説』(創文社 一九四八年) 五八四頁
- (23) 瀧本壽史「寛政改革と藩士土着政策」(長谷川成一編『津輕藩の基礎的研究』△国書刊行会 一九八四年▽所収) 参照
- (24) 「御用格」(寛政本) △弘前市立図書館蔵▽第六 御家中縁組之部
- (25) 註(13)によれば、十段(御目見以上) か十一段(御目見以下)のどちらか明らかでない。
- (26) ・(27) 註(1)参照
- (28) 註(22) 五八五―五八六頁
- (29) 弘前市立図書館蔵。尚、「日記」文化八年六月七日の条には、このような記事は記されていない。
- (30) 弘前市立図書館蔵。尚、「日記」天保二年六月二十四日の条には、このような記事は見えない。

(31) 弘前市立図書館蔵。尚、「日記」天保四年九月二十二日の条には、このような記事は見えない。

(32) 「日記」天保六年四月十一日の条に見えない。

(33) 「日記」天保十四年四月十二日の条に見えない。

(34) 註(4)四一六頁、四八七・四八八頁

(くろたき・じゅうじろう 弘前学院大学講師)